Shinshu University Institutional Repository SOAR-IR

上接語・下接語から見た助動詞キ・ケリの差異 ： 品詞レベルでの分析

著者	加藤 浩司
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 7: 3-15(1995)
発行年月日	1995-07-31
URL	http://hdl.handle.net/10091/00022397

(C) 1995 the Author.

上接語・下接語から見た助動詞キ・ケリの差異
—品詞レベルでの分析—

加藤　浩司

序、問題点の確認

古代語で「過去（回想）」を表わす助動詞とされるキとケリは、構文的・意味的に同一条件下で用いられることがある。例えば、源氏物語夕顔巻、夕顔怪死事件直後の光源氏が、帝の使いとして来た頭の中将に不参の弁解をする会話部分の、

「めのとにて侍る者の、この五月のころほひより重くわづらひ侍りしが、かしらそり忌む事うけなどして、そのしるしにや、よみがへりたりしを、このごろまたおこりて、弱くなむなりにたる、今ひとたびとぶらひ見よと申したりしかば、（中略）と思う給へてまかれりしに、その家なりける下人の病しけるが、俄に出であへでなくなりにけるを、おぢ憚りて、日を暮らしてなむ取り出で侍りけるを、聞きつけ侍りしかば、（以下略、角川文庫第1巻134頁）(1)

というキとケリの例など、いずれも「～の（同格）、～が（主格）、～したのを（のだが）（対格または接続助詞）」という構文であり、意味的にも、「～である人物で病気をしていたのが、よくなった（亡くなった）のを（のだが）」という似通った文脈である。この場合、両者の表現するものの違い—助動詞キとケリ自体の意味・機能の差異による違い—はいかなるものなのであろうか。

私はこれまでいくつかの文献を資料としてこの問題の解明を試みてきた(2)。ただし、前後が構文的・意味的に同じ条件下にあるキとケリの用例を比べても、キとケリ自体の差異は明らかにならない。そのため、方法としては、別の条件下にある両者の用例をも広く採り上げ、前後の文脈から解釈を施してキやケリの個々の用例における意味・用法を推定し、それを分類・集計し、用法として一般的か、特殊かつ例外的かを判断し、そこからキやケリのいわば普遍的な意味・機能を帰納的に導き出す、というやり方を採ることになった。これは助動詞（さらには多くの古語）の意味の研究において伝統的に採

られてきた方法である。

しかし、この方法は、用例の解釈が個々の研究者の判断に任せられるため、純粋に中立的な立場から行なうことのできる方法ではない。古文の解釈には辞書なり文法書なり注釈書なり、これまでの研究成果を利用せざるを得ない。各研究者は解釈に先立ち、意識するかしないかはともかく、必ず何らかの立場を選択しているはずである。結局この方法は、何らかの立場に立ち、それで矛盾なく全ての用例を説明できるか否かという形でしか試みることができない方法なのである。こうした研究の成果である各種の説については、いかに矛盾なくキ・ケリ全ての用例を説明し得ているかによってその当否を測るしかなく、説の提唱はたやすくとも、立場を異にする他の研究者を説得するのは困難である。

こうした方法に対し、キやケリがどのような構文的条件下で用いられているか、またどのような種類の語に接続するか、といった、用例の解釈とは関係なく誰が見ても明らかな違いに着目して両者の意味・機能の差異に迫ろうとする方法が考えられる。しかし、こういった方法による研究成果はこれまでのところ少ない。それはキとケリという助動詞の間にはこうした面での違いがあまり存在しないと考えられ、こうした方法がほとんど試みられなかったからである。

従来、こういった方法は個々の助動詞間の意味・機能の差異を明らかにするためではなく、助動詞全体を対象とした分類のための一手段として採られていた。その最も代表的で本格的な成果は、助動詞がある種の構文的条件下に立ち得るか否かや一述部内における助動詞相互承接順序の事実を助動詞分類に利用した、北原保雄氏『日本語助動詞の研究』（大修館書店、昭和 56〔1981〕）であり、同じく相互承接順序や助動詞が用言の何形に接続するかに着目して助動詞を分類した、竹内美智子氏『平安時代和文の研究』（明治書院、昭和 61〔1986〕）である。また近年では、各助動詞がどのような従属節中に現われるかに着目した、近藤泰弘氏「中古語のモダリティの助動詞の体系」（『日本女子大学紀要文学部』40、平成 2〔1990〕）や、さらにどんな係助詞の結びとなるかをも考慮した、高山善行氏「中古語モダリティの階層構造—助動詞の意味組織をめざして—」（大阪大学『語文』59、平成 4〔1992〕）という成果も現われている。

こうした成果の中でキ・ケリに関してもいくつか言及が見られるものの、

両者の意味・機能の差異を明らかにすることが目的ではないため、客観的な条件の相違がどの程度のものか、またそれが両者の意味・機能の区別に利用できるのかどうかが充分に検討されているわけではない。そこで本稿では、冒頭の例のような助動詞キとケリの意味・機能の差異を明らかにするような両者の客観的な相違―用いられる構文的条件や上接語の種類の相違―が全く存在しないのかどうかを今一度確認したいと思う。

具体的な方法としては、源氏物語という平安時代中期の大部な文学作品を資料とし、そこからキとケリの全用例を抜き出す。そして両者の上接語・下接語を調査し、品詞別（助詞・助動詞については、相互承接順序や構文的条件に関わるので各助詞・助動詞ごと）に集計する。上接語を調べればどんな種類の語に接続するかがわかり、下接語を調べればキやケリの用いられている述部がどんな文の成分となっているかがわかるからである。なお、本稿では用言の分析を品詞レベルで行なう。個々の語の意味のレベルでの分析はキ・ケリの付いている述部の自立語の調査をも併せ行なって別稿において考察する予定である。

1、調査の手順と調査結果

調査に用いた源氏物語の本文は、角川文庫『源氏物語第1～10巻』（玉上琢彌氏訳注、昭和39〔1964〕～50〔1975〕）である。地の文・会話・和歌などの区別なく全てのキ・ケリの用例を採った。ただし、キについて、「世の中に絶えて桜のなかりせば」などの「せ」という形は採らず、掛け詞の裏の意味でキとなるもの、例えば「なでしこ」の「し」なども採らない。慣用句や語の一部、例えば「過ぎにし年」「いにしへ」などの「し」は採る。ケリについては「～けらし」という形はとらない。

上接語について、「宣はす」を「宣ふ」＋「す（尊敬の助動詞）」とし、「知らす」を「知る」＋「す（使役の助動詞）」とするなど、分離できるものは積極的に分離して集計した。また、複合動詞間に受手尊敬を表わす「す・さす」「奉る・給ふ（下二段活用）」などが割り込んでいる用例の場合、例えば

もとより御身に添ひ聞えさせむにつけても、つつましき身の程に侍れば、ゆづり**聞え**そめ侍りに**し**を、（若菜上、第6巻90頁、明石女御に対する明石

の上の会話部分）
など、述部の自立語を集計する際にはこれを考慮して「ゆづりそむ」として集計する予定であるが、直上の上接語を集計する際には結果的に後項の動詞「そむ」に付いたものによって分類するのと同じ「ぬ（完了の助動詞）」として集計することとなった。

下接語については、引用を示す格助詞「と」や副助詞「など」の前部分は独立した文の文末と見なして扱った。また、通常接続助詞や係助詞とされるもののうち、

「すぐれてはなやかなる御おぼえこそなかりしかど、むつまじうなつかしき方には思したりし**ものを**」など思ひ出で聞え給ふにつけても、（花散里、第2巻185頁）

などのように、文末に用いられているものは終助詞として別に集計した。なお「連体中止」として、

「かの中の品にとりいでて言ひ**し**、このなみならむかし」と、おぼしいづ。（帚木、第1巻79頁）

のように準体用法の連体形に助詞等が付かずそのままで文の格成分や接続成分となっているものを別に集計した。

上接語については、品詞別及び補助動詞・助動詞別に分類・集計し、助動詞相互承接を考慮した配列で表1として示す。下接語については、文末の場合の各形態や助詞類をキとケリがどんな用法で用いられているかによって分類して配列し、表2として示す。

（表１）源氏物語キ・ケリ上接語 品詞・助動詞別一覧

上接語	キ計	小計	ケリ計	小計
動(除ラ変)	1045	(32.2%)	803	(22.0%)
ラ変動詞	312	(9.6%)	409	(11.2%)
す・さす	20	59	25	93
る・らる	39	(1.8%)	68	(2.5%)
奉る	37		5	
聞ゆ	33		27	
申す	1		2	
給ふ(下二)	50	618	1	484
給ふ(四)	351	(19.0%)	418	(13.3%)
侍り	145		31	
たうぶ	1		0	
形容詞	220	(6.8%)	284	(7.9%)
形容動詞	71	(2.2%)	48	(1.3%)
名詞+なり(断)	42	(1.3%)	344	(9.4%)
名詞句等+なり(断)	0	(0%)	14	(0.4%)
準体句+なり(断)	0	(0%)	128	(3.5%)
まほし	0	(0%)	2	(0%)
り	127		82	
ぬ	291	635	449	732
たり	167	(19.6%)	121	(20.1%)
つ	50		80	
ず	160	(4.9%)	215	(5.9%)
べし	20	21	68	93
まじ	1	(0.6%)	25	(2.5%)
めり	57	63	0	0
なり(伝)	6	(1.9%)	0	(0%)
計	3246		3649	

（表２）源氏物語キ・ケリ下接語 用法・助詞別一覧

用法	キ・ケリの活用形及び下接語	キ計	小計	ケリ計	小計
終止用法	（終止形終止）	89		1089	
	（ぞ～連体形終止）	20		386	
	（なむ～連体形終止）	88		289	
	（か・かは～連体形終止）	21		6	
	（や・やは～連体形終止）	14	331	12	2018
	（など・なに～連体形終止）	2	(10.2%)	1	(55.3%)
	（いかなり～連体形終止）	0		1	
	（連体形止め）	38		74	
	（こそ～已然形終止）	58		160	
	（已然形終止）	1		0	
終助詞終止	終止形＋かし（終助）	20		4	
	終止形＋な（終助）	0		3	
	終止形＋や・やは（終助）	10		15	
	（ぞ～連体形）かし（終助）	2		1	
	連体形＋かな（終助）	19		69	
	連体形＋こそ（終助）	0		2	
	（など・なに～連体形）ぞ（終助）	5		1	
	連体形＋ぞかし（終助）	7	111	0	140
	連体形＋は（終助）	0	(3.4%)	2	(3.8%)
	連体形＋はや（終助）	9		0	
	連体形＋ものを（終助）	19		5	
	連体形＋や（終助）	1		0	
	連体形＋よ（終助）	7		21	
	連体形＋を（終助）	11		11	
	連体形＋をや（終助）	1		3	
	（こそ～已然形）な（終助）	0		3	
接続用法	（こそ～已然形・逆接）	19		23	
	（已然形・逆接）	1		0	
	連体形＋からに（接助）	0		1	
	連体形＋ながら（接助）	0		1	
	連体形＋に（接助）	102	791	45	701
	連体形＋ものを（接助）	15	(24.4%)	4	(19.2%)
	連体形＋を（接助）	300		148	
	已然形＋ど（接助）	153		95	
	已然形＋ども（接助）	11		1	
	已然形＋ば（接助）	190		383	
連体修飾用法	連体形＋名詞	1607	(49.5%)	530	(14.5%)
準体言用法	連体形中止	24		39	
	連体形＋が（格助）	22		23	
	連体形＋と（格助）	2		1	
	連体形＋に（格助）	71		40	
	連体形＋より（格助）	51		1	
	連体形＋を（格助）	59		80	
	連体形＋さへ（副助）	2		0	
	連体形＋だに（副助）	11		1	
	連体形＋ながら（副助）	8		0	
	連体形＋など（副助）	12	406	7	260
	連体形＋のみ（副助）	1	(12.5%)	0	(7.1%)
	連体形＋ばかり（副助）	4		0	
	連体形＋まで（副助）	3		0	
	連体形＋こそ（係助）	10		9	
	連体形＋ぞ（係助）	1		2	
	連体形＋なむ（係助）	1		0	
	連体形＋は（係助）	37		9	
	連体形＋も（係助）	70		27	
	連体形＋や（係助）	1		0	
	連体形＋なり（断定）	16		21	
計		3246		3649	

2、上接語の相違から推定できるキとケリの意味・機能の差異

まず表１の上接語の調査結果について考察する。

表１を見てもキとケリに明瞭な相違の認められる項目は後で考察する二点くらいであり、全体として両者ともほぼ同様な語に同様な用例数で下接していると言える。相違する項目についても、調査によって得た用例数は両者とも 3000 以上であるが、源氏物語という特定の一文献に拠っているため、古代語において必ずしも他の語に下接する可能性がないわけではない。この点を考慮し、特に顕著な相違のあるものだけを取り上げて考察するに止める。

①準体句＋断定ナリ　キ―用例なし、ケリ―128 例。

北原氏は前掲書（513～528 頁）において、以下に示すような準体句＋断定ナリの構文におけるナリ（北原氏はこれを連体ナリと呼ぶ。以下これに従い、名詞に接続するものを体言ナリ、活用語の終止形―ラ変型には連体形―に接続するものを終止ナリで区別して表わすこととする。）に常に上接する（ａの位置のみ）か、常に下接する（ｂの位置のみ）か、上接も下接もするか（ｃの位置）という違いによって助動詞を次の三種に分類した。

（ S 　は）　P　（ａ）なり（ｂ）。
　　（ｃ）　　（ｃ）

（ａ）常に上接するもの―ス・サス・シム・ル・ラル・マホシ・（タシ）・ツ・ヌ・タリ・リ・キ・マジ・（体言タリ）・（補助動詞）

（ｂ）常に下接するもの―ム・ラム・ケム・マシ・ジ・ラシ・メリ・終止ナリ

（ｃ）上接も下接もするもの―ケリ・ズ・ベシ

北原氏はこの分類をもとに、それまで助動詞とされてきたものを大きく接尾語（詞的助動詞、有格の助動詞）と超格の助動詞（辞的助動詞）に分類し、キを前者に、ケリを両方に所属するものとした（同書 637 頁図）。キは時格と関係する接尾語、ケリは時格と関係する接尾語の場合と、格関係を超えて話者の主体的な判断を表現する助動詞の場合の二種があるとしたのである。

この調査でも、事実としてキが連体ナリに下接しないことは確認できたが、北原氏が展開した考察は冒頭の例のようなキとケリの意味の違いを明らかにするのには役立たないと思われる。

第一に、北原氏の分類ではキとケリに同じ時格の接尾語としての用法がある点である。つまり、

それはあの時に太郎の次郎に本を読ませ**し**なり。

それはあの時に太郎の次郎に本を読ませ**ける**なり。（例文は北原氏に拠る）

という二文のような、キとケリがどちらも連体ナリに上接する構文における意味の違いは説明できないのである。また、連体ナリを含まない構文、

昔、男あり**き**。

昔、男あり**けり**。

においても、ケリの方が接尾語として用いられているか超格の助動詞として用いられているのか判定できないため、両者の意味の違いは説明できない。

第二に、超格の助動詞は常に主体的表現のみに用いられるとは限らないと考えられる点である。北原氏はベシとケリだけを接尾語としても超格の助動詞としても用いられるものとしている。しかし、メリと終止ナリはキやツに上接することがあり、それについて北原氏も「これらの助動詞が、主体的表現であるというよりは、『ソノヨウニ見エル情態ニアル』『ソノヨウニ聞エル情態ニアル」というような、客体界の事態と対応するところの客体的表現にあずかる場合（同書 577～578 頁）」だと見なしている。こうした北原氏の解釈を拡大してゆけば、連体修飾用法や準体法に用いられているム・ラム・ジ・メリなどについても、北原氏自身はあくまでも主体的表現としている（472～476、500～507、580～584 頁）が、「ソノヨウニ推量デキル状態ニアル」という客体的表現にあずかる場合となってしまう。ということは、結局超格の助動詞でも接尾語同様に用いられることがあるということである。これは裏返せばキが連体ナリに上接する際には接尾語の機能を果していても、他の構文では超格の助動詞同様に用いられる可能性があるということでもある。そうすると、連体ナリを含まない構文においては、キとケリはどちらも接尾語か超格の助動詞的なものかわからないことになり、こうした場合の意味の差異を明らかにするのに北原氏の考察は役立たないのである。

①の結果から推定できることは別にある。連体ナリの用いられる構文全てを調べたわけではないが、連体ナリはどうやら「発話時点（まで）における話者の認識」を表わすものであって、特定の過去における認識は表わせないと思われる。（現代語で連体ナリに当たるものとされる「のだ」について、

「太郎は風邪で学校を休んだのだ」「太郎は風邪で学校を休んだのだった」はいずれも「太郎ガ風邪で学校ヲ休ムコト＝過去」だが、そう認識した時点がある特定の過去であることは示していないと思われる。ただ、認識したのが「太郎ガ風邪デ学校ヲ休ム」時点より後であることは示している(3)。）これにキが全く下接せず、ケリだけが多く下接している事実は、キが「特定の過去の事柄」を表現するのに用いられるだけであり、ケリが「発話時点（まで）における話者の認識」を細かく表現しわけるために加えられる（気づき、のような）意味で多く用いられることを示しているものと思われる。ただし、このような推定を確実なものにするためには、連体ナリの意味・機能をもっとしっかりと研究する必要がある。

②メリ　キ—57例、ケリ—用例なし。

終止ナリ　キ—6例、ケリ—用例なし。

ケリは調査結果に見えるようにメリ・終止ナリに下接しないし、また助動詞相互承接関係において上接もしない(4)。これはケリという助動詞の表わす意味が、メリや終止ナリの表わす意味と同レベルにあってしかも排他的関係にあることを示唆する事実であろう。竹内氏は前掲書でケリ・メリ・終止ナリを同列の判断辞として扱おうと試みている（同書284～293、322～324頁）が、それも理解できる。ただしケリはキとも相互承接しないので、これも同レベルの排他的意味関係と認められ、従来はキとケリを同列に扱う事が多かったのである。これに対し、キはメリにも終止ナリにも下接するから、別レベルの共起可能な意味の関係であろう。

北原氏は前掲書で「(a)グループの助動詞は客体的表現にあずかるものであるが、客体界の事象・事態は、分節（articulate）されて、その一つ一つがそれぞれの助動詞によって表現されうる。したがって、(a)グループの助動詞は重ね用いられるのである。これに対して、表現主体の事象把握についての主体的表現は、一つの文表現においては、原則として一種一回である。したがって、(b)グループの助動詞は重ね用いられることがないのである（578頁）」と述べている。客体的表現にあずかる助動詞でも同レベルの排他的意味関係にあるものは重ねて用いられることがない点注意しなければならないのだが、ほぼこうした考え方に従うとすると、ケリ・メリ・終止ナリが排他的関係になるのは北原氏の言う主体的表現の場合であろう。キとケリが排他的関係となるのもそれであろう。ところが、上述したように、キがメリ・終

止ナリに下接する場合はメリ・終止ナリはもはや客体的表現として用いられていると考えられた。つまり「ソノヨウニ見エル・聞コエル情態ニアル」ことが「過去」だ、ということである。この場合は重ねられて用いられても問題はないはずである。

むしろ問題は客体的表現としてのメリ・終止ナリにケリが下接しない点にある。これはケリの意味がメリ・終止ナリが客体的表現となった時の「ソノヨウニ見エル・聞コエル情態デアル」という意味と相容れないことを示すものであろう。

メリ・終止ナリという助動詞について用例を調べ直してみないと確実には言えない(5)が、この二つの助動詞は元来事象生起の時点に表現主体自身の視覚や聴覚で直接捉えた認識情報や、そうした情報による推定判断を表わしているようである。言い換えればこれらはある事象に対する「認識」や「推定判断」を表わすと同時に、その根拠となる事象生起時における表現主体自身の視覚や聴覚による直接的な情報認識という「直接体験」をも表わしているのである。だからメリや終止ナリによる「認識」「推定判断」をそう認識・判断されるような客体的な「情態」とし、そうした「情態」が「過去」にあったと表現する場合にも、前提としてそれは事象生起時における表現主体の視覚や聴覚を通じての直接体験によって捉えられた情報による「情態」でなくてはならない。この表現にキだけが用いられ、ケリが用いられないのは、ケリに表現主体の直接体験によって捉えられた情報による「情態」を表現する機能がないことを示すと思われる。逆にキにはそういった機能があると思われるのである。

3、下接語から推定できるキ・ケリの差異

次に表２の下接語の調査結果について考察する。

下接語の品詞はほぼそのままキ・ケリを用いた述部全体が文のどんな成分となりどんな用法に立っているかを示している。表２を見ると、全体としてキは連体修飾法や準体法に用いられることが多く、ケリは終止用法に用いられることが多い。明瞭に相違すると言える項目はないが、副助詞のうち「など」「だに」以外はケリに下接していない。ただキの用例数もわずかなのでこれをもって両者に明確な相違があるとは言えない。

結局、傾向としてキは連体修飾や準体法に用いられることが多く、コトガラとして対象化されやすい意味（過去の事態であること）で多く用いられていると推定されるのに対し、ケリはそうした用法は比較的少なく、逆に終止法に用いられることが多いため、コトガラとして対象化されやすい意味（過去の事態）よりも、話者の判断を表わす機能（気づき）で多く用いられているのだと思われる(6)。いずれにしてもこれは傾向であるから、個々の用例においてキやケリがどちらの意味・機能を表現しているのかは決定できないし、また両者ともに対象化された意味（過去の事態）を表わしている場合のさらに細かい意味の差異まではわからない。

結、キ・ケリの意味・機能の差異

以上、客観的に区別できる上接語・下接語の相違から構文的な条件や用法の相違を考え、そこから助動詞キ・ケリの意味・機能の差異を明らかにすることを試みた。

上接語については「連体ナリ」にキが下接しない点、メリ・終止ナリにケリが下接しない点が相違として示された。前者からはケリが「過去の事柄」を表わす場合と「表現主体の発話時（まで）の認識」に加わる「気づき」を表わす場合があるのに対して、キが「（特定の）過去の事柄」だけを表わすらしいことがうかがわれた。後者からは、キが表現主体自身の直接体験によって捉えられた情報による「情態」を表現する機能を持つらしいのに対し、ケリはそうした機能を持たないだろうということがうかがわれた。

下接語については決定的な相違はなかった。ただし、数量的にキは名詞や格助詞等が下接することが多く、ケリは終止することが多かった。これは傾向として、キがコトガラとして対象化されやすい「過去」等を表わすことが多く、ケリが主体的表現としての判断である「気づき」等を表わすことが多いことを示すものであろう。

結果として、キとケリが有する「能力」としての意味・機能について、その限界としての差異はうかがわれたが、冒頭に掲げたような同一条件下にあるキとケリの意味・機能の差異は充分明らかにすることができないようである。ただ、両者に意味・機能の違いがあるとすれば、それは「能力」の限界内での差異に限られるはずであるとは言えよう。

（了）

注

(1)本稿での源氏物語本文の引用は角川文庫本（詳細は本文中に後述）に拠り、所在を巻数と頁数で示す。

(2)拙稿「助動詞キ・ケリの機能―最勝王経古点・三宝絵詞・今昔物語集を資料として―」（田島毓堂・丹羽一彌編『日本語論究２―古典日本語と辞書―』、和泉書院、平成４〔1992〕）「蜻蛉日記における助動詞キ・ケリの用法について」（『名古屋大学人文科学研究』第23号、平成６〔1994〕・３月）「助動詞キ・ケリが示す『体験性』の差異について―付、大鏡における公事・私事の錯綜―」（『信州大学人文学部人文科学論集』　第29号、平成７〔1995〕・３月）など。

(3)三上章著『現代語法序説』（くろしお出版、昭和49〔1974〕）では「何々スル、シタ」を単純時、「何々スル、シタ＋ノデアル、ノデアッタ」を反省時と呼んで区別し、反省現在「何々シタノデアル」と反省過去「何々シタノデアッタ」はともに「完了」を表わす点でほとんど違わないとしてい る。

(4)竹内美智子氏前掲書227頁の図など参照。

(5)源氏物語におけるメリ・終止ナリの用例に限定すれば、ほぼ次のような点が認められる。

①動詞及びボイス・敬語・アスペクト系の補助動詞・助動詞にメリ・終止ナリが下接している場合は、メリ＝観察による認識、終止ナリ＝聴覚・伝聞による認識、をそれぞれ表わしている。

②話者以外の人物の心理を表わす語・語句、準体句＋連体ナリという発話時（までの）判断、及びベシ・マジ等推定の助動詞にメリ・終止ナリが下接している場合は、メリ＝観察によって得た情報による推定判断、終止ナリ＝聴覚・伝聞によって得た情報による推定判断、をそれぞれ表わしている。

③例外として、聞き手への配慮からと思われる婉曲的表現としてメリ・終止ナリが用いられることがある。

④なお、メリ・終止ナリによって表現される事象や判断は発話時現在のも

の（発話時現在の出来事・状態や習慣・恒常的事実などか、またはそれによる判断）であり、過去のそれらはメリ＋キ、終止ナリ＋キという形で表現されている。

(6)源氏物語の地の文は「～けり」「～なむ（ぞ）～ける」といった阪倉篤義氏（「竹取物語における『文体』の問題」、『国語国文』25―11、昭和31〔1955〕・11月）の言う「物語る様式」を多く含むことが考えられるので、その点を考慮すると断言はできない。

付記　本稿は平成7年2月26日に松本市あがたの森文化会館で行なわれた「長野県ことばの会」平成6年度研究発表会及び総会において、「源氏物語における上接語・下接語から見た助動詞キ・ケリの差異（1）品詞」と題して発表した内容をもとに書き改めたものである。当日、有益な御質問・御意見等を賜わった方々に感謝申し上げるとともに、それらを本稿に充分に生かすことができなかったことをお詫びしたい。

（かとう　こうじ　・　信州大学人文学部助手）